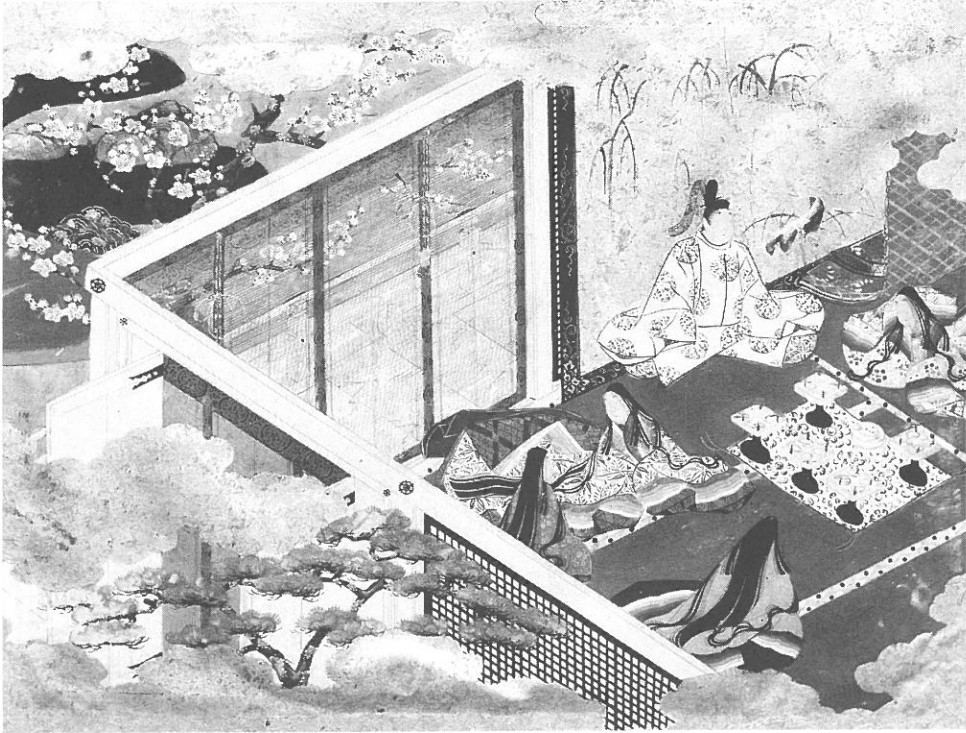


# 源氏物語手鑑



初音より

## 和泉市久保惣記念美術館

大阪府和泉市内田町85 〒590-02

TEL 0725-53-1071

平安時代、十一世紀の初頭、源氏物語が成立して以来、その絵画化すなわち源氏絵は、絵巻、冊子、画帖、扇面、屏風などとして数多く製作され、工芸品にも多く意匠としてとりいれられた。源氏絵は、単独、あるいは数ヶ所の有名な場面を特別に選ぶ場合もあるが、源氏五十四帖の各帖から、ひとつ以上の場面を選びワン・セットとし、情景を視覚的に味わいながらおおよそのストーリーをおえる様に構成されている場合もある。

室町時代末期から江戸時代前期にかけては、土佐派、狩野派、宗達派をはじめ数多くの絵師達により源氏絵が描かれているが、なかでも土佐派は、画帖など小画面の細密な源氏絵の製作にその腕を揮っている。

源氏物語手鑑はもと四十枚の折帖で、一葉ごとの表裏に、上下に詞書と絵が貼られていたのを都合八十枚の台紙に貼りなおしたものである。改装時には絵の裏に「土佐久翌」の重郭円形印と、詞書の裏に揮毫依頼覚書風の名前とが確認されたというが、台紙の上方の小さい付箋に記されている詞書の筆者名は、おそらくこれに拠ると思われる。いま一番、二番、四一番、六一番の台紙にのみ「土佐久翌」重郭円形印が貼られている。源氏物語手鑑の名称については、もとの帖の表紙の題箋に「光源氏手加々美」とあるところから充てられたのであろうが、残念ながら以上の事以外に改装時の状況は詳らかでない。

詞書の料紙には金銀、まれには墨で秋草、松樹、藤、桜に流水など様々の文様を描きわけられ、一枚として同じ図様はない。寸法は縦十七又は十九センチ前後の場合が多く横は一定しない。筆者については今後研究しなければならないが、付箋に拠ると、烏丸中納言、飛鳥井中納言、冷泉三位、中院少将、持明院少将など能書家や御家流の書をよくした公家達十八名になる。因に烏丸家では光廣(一五七九〜一六三八)が慶長十七年より元和二年まで権中納言に任官されている。

絵は、五十四帖から、有名な場面を中心に八十選ばれ、土佐派独特の細密な筆致で、金銀をふんだんに駆使し、絵具は鮮麗かつ濃厚である。寸法は縦一九・八センチ前後、横二六センチ前後とほぼ一定である。

土佐光吉(天文八〜慶長十八)は、剃髪して久翌(休翌・休欲)と号した桃山期における土佐派の代表的画人である。土佐光茂の門人であったが、宗家の光元が秀吉に従軍して但馬方面で戦歿した永禄十二年以後は、土佐派を継承し、堺に居を構えて作画活動を行った。

画の特徴は「活動無く美細を要る」(『丹青若木集』)、「筆法は専ら規矩を守る」(『本朝画史』)などと土佐派が評されているように、金銀・濃彩を多用した細密画で、大和絵の伝統的技法・作り絵に則ったものである。

『図画考』などの画伝類には、源氏物語小画・秋野日月屏風・利休肖像などが伝えられているが、現存する作品は少ない。わずかに源氏物語を主題にした作品が数点知られており、本手鑑は「源氏物語図画帖」(京都国立博物館)とともに、光吉画の基本資料である。金碧障屏画全盛期における絵画制作の一端を知る上で欠かせない。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
一番 桐壺一	帝の寵愛を一身に受けた桐壺の更衣は、玉のような御子を生んだ。御子が七歳の時、帝が御子を鴻臚館で高麗の相人(人相見)に占わせると相人は天子の相を見てとり、親皇になれば国が乱れるかもしれないと予見した。帝は御子に源氏の氏を与え、将来は臣下として帝を補佐させることにした。
二番 桐壺二	十二歳、清涼殿での元服の場面。源氏はまだ角髪に結び着座している。帝は椅子に坐り、顔は御簾の内、衣冠束帯で裾を長く引くのが加冠役の左大臣。後、姫の葵上を正妻とする。
三番 帚木一	源氏十七歳の夏の長雨の宵。源氏は着物の紐を結ばずにしどけない姿で、女から届いた恋文を頭中将にみせる場面。他の二人は左馬頭、藤式部丞。後にいわゆる雨夜の品定め(理想の女性論)の段となる。
四番 帚木二	左馬頭が語った「ざればみすきたる(なまめかしくて浮気な)」女の話。神無月の月夜、菊、紅葉が趣ある邸内、ある殿上人の吹く笛に、女は簾の内と和琴を合す。戯れかかる歌を詠む殿上人に女は歌を返しさらに箏の琴を弾く。左馬頭は荒れた築地のくづれからこの様子をうかがっている。
五番 空蟬	源氏は、伊予介の妻、空蟬が忘れられず、ある夜、寝所へ忍び込むが空蟬は小桂を脱ぎ捨てて去り、源氏はこの小桂に心情をたくし、詞書にある「空蟬の……」の歌を詠む。
六番 夕顔一	源氏は六条御息所訪問の途中、ある家の白い花に目をとめ、その家の女童から扇にのせた夕顔をもらう。
七番 夕顔二	霧の深い早朝。六条御息所の邸を出ようとする源氏は、見送りの女房の美しさに心を引かれて歌を詠む。御簾越しに見送るのは御息所。
八番 若紫	若紫の巻といえば、源氏が「わらわ病」快癒のため赴いた北山のある僧房で、後の紫上を見出す場面が有名であり、多くの源氏絵がこの場面をとりあげているが、この手鑑では、その後の場面、みやまおろしの風に伴ってきこえてくる懺法(罪を懺悔する経典を誦誦する法要)の声に感涙をもよおす場面を採用している。
九番 末摘花一	梅の香のゆかしい十六夜、源氏は末摘花の邸を訪れるが、透垣の外で頭中将と出会ってしまう。末摘花は御簾の奥で琴を弾く。右上方雲間に十六夜の月。
十番 末摘花二	七弦の琴は琴の中でも最も格の高いものとされ、源氏物語では、源氏、末摘花の父の常陸宮などが名手とされる。
十一番 紅葉賀	末摘花の邸で過ぎた翌朝、橘の木の雪をはらわせる源氏。容姿こそ勝れていないが、古風な氣立ては、後に源氏の庇護を受ける因となる。源氏が元旦の朝拝に赴く前、二条院の西の対に住む紫の上(十歳頃)を訪れる場面。紫上はひいな遊びをしており、源氏は「今日からはひとつおとなになられましたか」とほほえみかけている。
十二番 花の宴	この帖の名は、桐壺帝の行幸の際、源氏が冠に紅葉を挿し、青海波を舞うのに因んでいる。右大臣邸の藤の花の宴の夜、六君(朧月夜君)と再会する場面。源氏は妻戸の御簾から身を入れて、几帳越しに六君の手をとり歌をかわした。この一件が後、右大臣側の不興をかい、須磨へ退く一因となる。
十三番 葵	賀茂の斎院の御輿の日、葵上の車と、六条御息所の車とが、車の立てる場所をめぐる争う場面。後、御息所の生霊が葵上にとりつき、葵上は男子(夕霧)を産み、息絶えてしまう。
十四番 賢木	六条御息所が娘の斎宮と共に伊勢へ下向しようとするのをひきとめるべく、源氏が野の宮を訪う場面。源氏の手には櫛をもたせており、文と共に贈ったと思われる。画面左方には、野の宮の象徴である黒木の鳥居と小柴垣を配置している。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
十五番 花散里	五月雨の珍しく晴れた日、花散里を訪ねる途次の源氏に昔逢った女の家から琴の合奏が聞こえる。桂の木の追風に昔を思い出し、折からの郭公の声に促されて惟光を遣わすがおもわしい返事はなかった。
十六番 須磨	源氏二六歳の頃、須磨に退去するが、その年の仲秋の名月の夜、雁のつらなつて鳴く姿に、沖合をながめながら、心情をたくして歌を詠むところ。遠景には、こぎ行く舟、雁の群、右隅に満月を、近くに前栽には、萩、薄紫苑などを配している。
十七番 明石一	うららかな春、去年植えた桜の若木が花をつけた。須磨の住むいは、源氏に都への想いをつのらせる。 (注) 付箋帖名は明石一となっているが、詞書・絵ともに須磨の帖の内容を示している。
十八番 明石二	源氏を娘婿にと望む明石入道は須磨から自邸に源氏を迎え入れる。四月のあるのどやかな夕月夜に源氏は筆を、入道が琵琶を奏し、たがいうちとけた時を過ごした。源氏を婿に望む入道は、折をみて姫のことを語った。
十九番 滯標一	五月雨の頃、花散里を訪ねた源氏。朧月のもと、花散里は折しも水鶏が近くで鳴いたのを機に源氏を月に託して歌を詠む。
二十番 滯標二	源氏帰京後の住吉詣。帝から賜わった童隨身は美しい装束をし髪は角髪姿である。朱の鳥居と砂浜に松原で住吉を表わし、偶然同じ日に参詣した明石上は沖の船より、このはなやかな一行をながめている。
二一番 蓬生	四月のある夕月夜、源氏が松にかかる藤に心ひかれて立ち寄った荒廃した邸で、末摘花と再会する場面。蓬の露を馬の鞭ではらうのは惟光。
二二番 関屋	源氏二九歳の秋。石山詣の途中、逢坂の関で上洛する常陸介と空蟬の一行に出逢う。道をゆずる常陸介一行。後日源氏は空蟬と消息をかわす。
二三番 絵合	源氏三一歳の三月、冷泉帝の妃、梅壺女御と弘徽殿女御が御前で絵合をするが、最後に出された源氏の須磨の絵日記が人々の心をとらえ、源氏の応援する梅壺方の勝となる。この場面は源氏の思慕する藤壺中宮の前に両者の絵を納めた箱が置かれている。
二四番 松風	明石からようやく上洛し大井に住む明石上を源氏は嵯峨の御堂の用を口実に訪れる。訪ねた帰り、鷹狩りに来ている殿上人たちが多く集まっている桂院を訪れた。殿上人たちは小鳥を萩の枝に付けて源氏に献上し、遊宴が催された。
二五番 薄雲一	明石の姫君が紫上の養女となるべく、大井の邸から二条院にひきとられる場面。別れを悲しみ、抱いているのは母の明石上。女房が蒔絵の箱の蓋に納め、さしだしているのは守り刀と天児(子供のお守りとして傍らに置く人形)。
二六番 薄雲二	明石上の寂しさを慰めに大井邸を訪ねた源氏。大井川に浮かぶ鶴舟の篝火に我身のつらさを詠む明石上。
二七番 檜	桃園宮に住む権(朝顔齋院)に心を寄せる源氏は、紫上の煩悶をよそに、雪の夕暮、桃園宮を訪ねる。西門の錠が錆びついてなかなか開かない。
二八番 乙女	この帖では源氏(三三歳〜三五歳)は太政大臣になり栄達の途につくことになる。六条には大邸宅も造営され、春の趣き深い庭を配する東南の一面には源氏、紫上、明石姫君、秋の庭を配した西南の一面には秋好中宮(絵合の帖の梅壺女御)東北、西北の一面には花散里、明石上がそれぞれ住んでいる。この場面は、里下り中の秋好中宮が女童に色とりどりの秋の花や、紅葉をもたせて紫上に遣わすところ。その上に中宮の文をのせている。
二九番 玉鬘一	夕顔の遺児、玉鬘の一行が長谷寺参詣の折、樺市の宿坊で、かつて夕顔に仕えていた右近と出会う場面。画面左下方で横になっているのが玉鬘か。これが契機となり、源氏の耳に届き、玉鬘は六条院に迎えられる。
三十番 玉鬘二	年末、源氏は新春用の衣裳配りをする。おとなびた女房が御衣櫃から衣裳をとりだしたり、衣箱にいれて届けようとしている。源氏の傍らの紫上は、衣裳の色目、文様などからまだ会ったことのない明石上、花散里、玉鬘達の人柄、個性を想像している。
三一番 初音	源氏三六歳。六条院の元旦、女君達への年賀が華いだ雰囲気の中で行なわれる。まず紫上方で長寿健康を願う園固めの祝をする。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
三二番 胡蝶	三月二十日すぎ、紫上の春の庭は花の盛りである。紫上は秋好中宮への返礼として中宮方の女房を招き、船で庭を廻遊させた。翌日、中宮の季御読経が行なわれ、紫上は趣向をこらし、迦陵頻と胡蝶の装束をつけた童に供養の花をもたせて贈った。画面の上下に、二場面を組み込んで描く。
三三番 螢一	六条院にひきとられた玉鬘は養父源氏から懸想され当惑する。美しい玉鬘の評判をきいて思いをよせる螢兵部卿官が源氏のはからいにより、螢の光で玉鬘を垣間見る場面。几帳ごしに螢とその光がほのかにみえる。
三四番 螢二	五月五日、六条院の馬場で催された騎射の競技と競馬。見物の殿上人も思い思いの装いで集う。
三五番 常夏	夏の暑い日源氏が東の釣殿で涼んでいる場面鮎や石ぶし(かじかに似た魚を調理させ賞味しようとしている。氷水の入った赤い口履いの瓶を側置かれている。源氏三六歳の初秋、玉鬘と琴を枕に臥し、歌を贈答する。外の様子は原文の「……いと涼しげなる遺水のほとりにけしき殊にひろがり臥したる檀の木の下に、打松・おどろ／＼しからぬ程におきて……」のとおり。篝火は月がないため、源氏が配慮して、ともさせている。打松とはたいまつの事。
三六番 篝火	夕霧が父源氏の名代で秋好中宮の野分見舞に参上し、遠くから目にした光景である。女童達は強い野分に荒された庭の秋草のなか、虫籠を手に露をかはしたり、風でいたんだ撫子を手にとったりしている。脇息にもたれているのが秋好中宮。
三七番 野分	十二月、冷泉帝の大原野行幸の光景。手前には鳳輦(天皇の儀式、行幸に用いる)を配し、帝が大原野に到着した体になっている。遠くは狩をする様を、この手鑑では珍しく広い視界でとらえ小画面におさめている。源氏は供養せずに、御酒などを奉っている。
三八番 御幸一	物忌みのため、鷹狩りの行事にお供しなかった源氏のところへ、冷泉帝より雉二羽をつけた柴の枝が届けられた。
三九番 御幸二	大宮の喪に服している玉鬘のもとを、同じく服喪中の夕霧が源氏の使いで訪れた折、藤袴の花と求愛の歌を贈る。両者共、鈍色(薄黒色)の喪服姿。夕霧が冠の纓を外巻きにしてとめているのは凶事の作法である。この時すでに玉鬘は高侍出仕が決定している。
四十番 藤袴	源氏は玉鬘を髭黒大將に嫁がせる決心をする。髭黒は玉鬘を自邸に迎える準備をすすめ、ある雪の夜、玉鬘を訪れようとしたやさき、傷心の北の方に物怪がつき、火取香炉の灰をうしろからあびせる場面。
四一番 真木柱	帖の名は、娘が邸を去る時、柱の刻目に別れの歌を書いた文を挿した事による。
四二番 梅ヶ枝	源氏三九歳の春、二月十日、丁度、雨がすこし降り、紅梅のゆかしい頃、薫物合せが催された。その夜、源氏が螢兵部卿官に装束一揃、薫物二壺を届けるところ。
四三番 藤裏葉	四月七日の夕月夜、藤の花の宴に内大臣は夕霧を招き、かつてから相思相愛の娘の雲井雁との結婚を許す。柏木がそばから藤の枝を客人夕霧の盃に添えている。
四四番 若菜一	髭黒左大將の北方玉鬘が振分髪・直衣姿の幼子二人とともに源氏四十の賀を祝う。祝儀の若菜が各自に出される。
四五番 若菜二	賀の後、女三宮が源氏に嫁し、正室となる。
四六番 若菜三	六条院で明石女御が皇子を出産。皇子を抱くのは紫上か。明石上は御湯殿の世話役を立派に務める。部屋の奥に湯桶、角盥、木製の桶などを描いている。 正月二十日頃、庭の梅のさかりの静かな宵、女三宮の部屋での女楽の場面。左端、脇息にもたれているのが明石中宮。まんなかが六弦の和琴、(図では十三弦の箏になっている)を弾く紫上。右が七弦の琴を弾く女三宮。後姿が琵琶を弾く明石上。御簾の外では夕霧が明石中宮の弾く箏の調子をあわせている。その横で玉鬘、夕霧それぞれの長男が笙、横笛を吹いている。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
四七番 若菜四	朱雀院五十の賀の試案。衆人は「仙遊霞」を奏す。源氏や殿上人などが見守るなか鬚黒大将、夕霧、螢兵部卿宮の御子達四人は「萬歳楽」を舞う。
四八番 柏木一	女三宮を忘れられず、密会した柏木は自責の念から煩悶し、病床に臥してしまふ。両親が加持祈禱をさせるため、聖を呼んで対座しているところ。柏木は後、むなく他界してしまふ。女三宮は不義の子薫を生み、髪をおろし受戒する。
四九番 柏木二	柏木の死後、落葉宮が寂しく暮らす一条宮を弔門した夕霧。主のいない邸で、変らずに花をつけた桜があはれをもよおす。
五十番 横笛一	女三宮のもとで育つ薫が笛をかもうとする様子を、源氏は複雑な思いで、「子は捨てがたい」との意の歌を詠む。帖名とは後に柏木遺愛の横笛が夕霧に贈られたことに因む。
五一番 横笛二	柏木遺愛の笛を譲り受けた夕霧の夢に桂姿の柏木の霊が現われ、笛を子(薫)に伝えるようにと告げる。
五二番 鈴虫	源氏五十歳の秋、八月十五日の月夜、六条院で女三宮が仏前で念誦しているところへ源氏が訪れ、折からの鈴虫の音に歌を贈答し、琴をかきながら。後向で仏前に鬘伽を供えているのは女三宮。
五三番 夕霧一	柏木の亡きあと、その妻の落葉宮に心よせる夕霧は、八月十日すぎ、小野山荘に宮を訪うが、軽々しいうわさがたつのを懸念して供の者に大きな声をたてない様に注意を与えている。原文では、日没の頃一面に霧たちこめる設定になっており、遠景の、鹿、瀧などは語られていない。後に、御息所亡きあと、落葉宮をなぐさめる為、九月十日すぎの夕方に訪れた時の情景が、この絵の鹿、瀧、稲むらなどの様子とはほぼ一致する。
五四番 夕霧二	蔵人少将(柏木の弟)が、雲井雁の父致仕大臣からの文を、夕霧と落葉宮のいる一条宮に届ける。
五五番 御法	病気がちの紫上は出家を希望したが源氏は許そうとしない。三月十日、桜の花ざかりの頃、死を予感して、明石上に明石中宮の三宮(匂宮)を遣わして歌を贈答する。紫上はこの年の八月十四日、惜しまれながら逝去する。(四三歳)
五六番 幻	紫上を亡くして悲しみにくれる源氏は春の花の頃入道宮(女三宮)を訪れる。直衣もことさらやつして無文を着る。匂宮も共に訪れ薫と走り遊ぶ。女三宮は仏前で経を讀んでいる。源氏は山吹の花に目をとめ、これを植えさせた紫上の事を思いしのぶ。幻では、紫上他界後、傷心の源氏の様子を中心に物語が進行するが、年末、源氏は大切な紫上の消息などを焼却させ出家の決心をする。以後物語に源氏は登場しない。
五七番 匂宮	賭弓(正月、宮中での競射の儀式)の勝方夕霧は、匂宮ほか多くの君達を六条院に招く。華かな場を好まぬ負方の薫までも無理に牛車に乗せた。
五八番 紅梅一	匂宮を中君の婿に望む按察大納言が、文を一枝の紅梅に添えて匂宮に届けた。匂宮は気の進まないまま返事をしたためる。
五九番 紅梅二	按察大納言(柏木の弟)は、藤原氏の繁栄を願い、愛くるしい姫大君を春宮(皇太子)に奉る。入内する大君を乗せた牛車を描いたものか。(五八、五九番は絵・詞共に前後の順が逆である。)
六十番 竹河一	竹河では鬚黒他界後、玉鬘やその子女達を中心に物語がすすむ。この場面はかねてより大君に心よせる蔵人少将が、桜の花びらをかけて暮をつ大君と中君を垣間見るところ。女童達は時絵の箱を手に花びらをあつめようとしている。
六一番 竹河二	冷泉院に参上した大君を思う薫は、藤侍(大君の弟)と院内を歩く。五葉松にかかる藤の花を大君に見立てて歌を詠みかわす二人。
六二番 橋姫一	いわゆる宇治十帖の物語がこの帖から始まる。 薫は晩秋、源氏の異母弟宇治八宮の山荘を訪れ、その姫達、大君と中君が合奏している姿を垣間見る。中君が琵琶を前に、撥を玩んでいると、あたかも扇でまねいたように雲間から月がにわかさし出た。大君は筆に身をもたせかけている。
六三番 橋姫二	十月、宇治の山荘を訪ねた薫は、八宮の姫君達の合奏が思い出されて、八宮に琴の演奏を所望する。薫も勧められるままに琵琶を合奏す。

付箋番号帖名	場面の内容概略
六四番 橋姫三	薫は八宮から姫君達の将来を託された後、弁御許(柏木の乳母子)から出生の秘密を知らされ、柏木の遺言状などが入った袋を受け取る。
六五番 椎ヶ本	長谷寺詣の帰途、夕霧の宇治の別荘に中宿りした匂宮一行は、碁・双六・琴などで憩う。衆の音が伝わり対岸の八宮から文が届いたところ。
六六番 総角一	大君に心よせる薫は大君から妹の中君を託されるが、かねてから中君に執心の匂宮を宇治に伴う。
六七番 総角二	新婚三日目の夜が明け、薫は中君の美しさを朝ぼらけの光のなかでながめ満足する場面。遠くには宇治の橋と柴積む舟が行き交う。
六八番 早蕨	中君に会いたく思う匂宮のために、薫は宇治川の紅葉狩りを企てた。紅葉で屋根を葺いた舟や管絃の様子を八宮邸から女房達が眺める。
六九番 宿木一	匂宮は中君を訪れることがままにならないうちに、夕霧の六君との婚約が決定した。大君は悲観のあまり他界し、中君は失意の底に沈む。
七十番 宿木二	山荘で寂しく春を迎えた中君を山の阿闍梨が早蕨や土筆を美しい籠にいれて贈り慰める。
七一番 東屋一	藤壺女御の他界後、帝は碁の賭物の菊に寄せて、薫を姫君女二宮の婿にとほめかす。薫は庭の菊枝を折って辞意を込めた歌とともに奏上した。
七二番 東屋二	若君をかわいがる匂宮と中君の姿をのぞきみるのは浮舟の母中将君。浮舟は中君の異母妹にあたる。
七三番 浮舟一	薫は浮舟を宇治の山荘にかくまう。月の夜、浮舟の父八宮を思い出して琴を弾く薫と、うつ向きがちな浮舟。弁尼から文を添えた果物が届く。
七四番 浮舟二	正月、匂宮が若君をあやす中君の部屋。若君には浮舟から包文と鬘籠を小松につけた卯槌(正月に贈る縁起物)、中君には右近の立文が宇治から届く。
七五番 蜻蛉一	深更、匂宮は浮舟が匿われている宇治を訪れたが、薫が手配した警戒がきびびり浮舟には会えず、物陰で浮舟の待従と会っただけで帰京する。二人はあおり(鞍下部から馬の両脚に垂れる泥よけ)を敷いて対座している。人の気配に、犬は怪しんで鳴き、隨身は弓の弦を鳴らしている。
七六番 蜻蛉二	暑さのきびしい夏。明石中宮の法華八講も終わり、氷を手にと涼を取る女一宮。扇を使う女房。薫は覗き見し、女一宮を強く思慕する。
七七番 手習一	浮舟の失跡後、薫もまた愁嘆にくれた。その年の秋の夕暮、西の渡殿を訪れた薫は、蜻蛉がもはかなげに飛び交う様をみて、大君、中君、浮舟をしのぶ。
七八番 手習二	横川の僧都達が宇治院の木立で浮舟を偶然発見するところ。この後、浮舟は僧都の加持のお蔭で意識が回復する。
七九番 手習三	小野の里の尼庵に身を寄せる浮舟は、尼君の亡娘の婿中将に懸想され困惑する。月の出た夜に中将が訪れ、尼君達と合奏する。
八十番 夢の浮橋	尼君達が初瀬詣をした留守のつれづれに、浮舟は少将尼から碁にさそわれる。浮舟の碁の強さに驚く少将尼。 薫は浮舟の弟、小君を文使いにして小野の尼庵のもとに遣わすが浮舟は面会もせず、返事も書かない。誰かが浮舟を隠しているのかと、薫が悲しむところで物語は終わっている。

常設展「源氏絵」を御鑑賞の際、参考にしていただければ幸いです。

源氏物語主要人物系図 — 源氏物語手鑑に登場する主要人物 —

